
それでも

清音純

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

それでも

【コード】

N0932C

【作者名】

清音純

【あらすじ】

生まれつき顔立ちが良いこと以外何の取り柄もなく、それだけの理由でのけ者にされてきた私。そんな自分の運命を呪っていた私はある夜、一人の男子に出会った……。

それでも

(前書き)

この物語はフィクションです

それでも

昔からそうだった。

お金持ちでも貧乏でもない、普通の家で生まれた私。特に頭がい
いわけでもなく、運動ができるわけでもなく、特技なんて聞かれて
も何もない、いわゆる普通の子。

それなのに、どうしても私はのけ者にされるのだろう。

初めはわからなかった。だから頑張った。皆と仲良くしようと、
皆に好かれようと、色々努力した。でも、結果は同じだった。

そうして中学を卒業して高校に入学した頃、私はようやくその原
因を悟った。お母さん譲りのきれいな顔立ち。思い出してみると、
中学に入学したての時やクラス替えしたばかりの頃、私に話しかけ
てきたのは大抵男の子だった気がする。他の女の子達は、何もない
私が男の子に人気があるのが気に食わなかったらしい。

そんな私のせいじゃないのに。私は何も悪くないのに。

でも、それが現実。だから、私は現実を受け入れる事にした。私
は生まれつき不幸な運命だった。そう考えて、私は自分を納得させ
た。

高校を卒業して大学に入った最初の年、私はサークルの合宿でと
ある山奥の旅館に来ていた。別にどうしても入りたかったわけでは
ないが、クラスの人に誘われたのでなんとなく入ってみただけのサ
ークル。どうしてもいい話を話して、何が面白いのか大声で笑い声を
あげる人達。私は適当な理由をつけて夜の宴会場を抜け出し、外へ
出た。

季節は夏。外の蒸し暑さを心地よい夜風が少し和らげてくれる。
都会と違って、夜空にはたくさん星が輝いていた。

なんとなく旅館の周辺を散歩してみる。辺りは静寂に包まれ、耳
に聞こえてくるのは小さな鈴虫の鳴き声だけ。旅館の周辺にある森

それでも

は真つ暗で、奥に何があるのかは全くわからない。

このまま奥に進んだら、闇の中に音もなく溶け込んでしまつかもしれない。そう思いながらも、私の足は自然と森の奥へと進んだ。

森の中は思ったより足場が悪く、散歩というより探検のようになつてしまった。それでも、私は前に進み続ける。いつからか鈴虫の鳴き声も聞こえなくなり、辺りは私の足音以外、一切の音が遮断されている。唐突に、自殺の名所といわれるなんたら樹海の事を思い出した。

どのくらい歩いたのか、自分でもよくわからない。もう足がくたくたになつて歩くペースも落ちてきた頃、私はふと森を抜けて開けた場所へと出た。その先は崖になつていて、これ以上は先に進めない。今まで森の木に遮られていた月明かりが私を明るく照らし出す。その時、私は崖のところの人に人が立っているのに気がついた。私の足音に気がついたのか、その人がゆっくりこちらを振り返る。そして、私の顔を見ると、

「こんばんは。今日はいい月ですね」

と、挨拶をしてきた。

私と同じくらいか、少し年上に見える男の子。男の子は優しく瞳で黙つたままこちらをじつと見つめていた。

「こんなところで何をしてるんですか？」

居心地が悪くなつた私は当たり障りのない質問を投げかける。すると、彼は困つたように苦笑いを浮かべた。

「さあ……何してるんでしょうね？」

何故か逆に質問を返される。今度は私が困つたような苦笑いを浮かべた。

「あなたこそ、こんなところで何をしてるんです？」

「散歩です。サークルの合宿で近くの旅館に泊まつてるので……」

「そうなんですか。でも、もう夜も遅い。早く旅館に帰った方がいいですよ。道はわかりますか？」

それでも

「あ、はい。多分……」

随分長いこと歩いてきた気がするが、一直線に歩いてきたはずなので迷うことはないだろう。

「それは良かった。私ももう帰ります。お互い早く帰りましょう」

「そうですね」

それから別れの挨拶を交わして、私は旅館へと引き返して行った。

翌日の夜、私はまた昨日と同じ場所へ向かっていた。旅館の部屋では相変わらずバカ騒ぎが続いていたが、私は最初だけ顔を出してすぐに抜け出した。彼らとバカ騒ぎするより、静かな森の中にいる方がよっぽどいい。

昨日と同じ道筋を辿って、同じ場所へと辿り着く。すると、また同じ場所に昨日の男の子が立っていた。

「こんばんは」

今度は私の方から挨拶する。彼はその声に振り返ると、少し間を置いてから、

「こんばんは。今日はいい月ですね」

と、昨日と同じ挨拶を返してきた。

「いつもこの時間にはここにいらっしゃるんですか？」

私がそう尋ねると、彼はまた困ったような苦笑いを浮かべた。

「まあ、そうですね」

「この辺りに住んでいるんですか？」

「ええ、まあ……。あなたは？」

「私は昨日と同じく散歩です」

「そうですね。でも、夜ももう遅い。早く帰ったほうがいいですよ」

「昨日よりはだいぶ早いですよ」

「え？ ああ……そうですね」

彼は慌てた様にそう言うともまた苦笑いを浮かべた。

その後、たわいもない話した後、別れの挨拶を交わして私は帰路についた。

それでも

ただ一つの違和感を残したまま。

翌日の夜、私は三度同じ場所を訪れた。合宿も今日で最後。どうしても、確かめなければならぬ事がある。いつもと同じ場所に来ると、やっぱりいつもと同じ場所に彼は立っていた。

「こんばんは」

私は昨日と同じ様に彼に挨拶する。その声に、彼はゆっくりとこちらを振り返った。

「こんばんは。今日は……」

「今日も、いい月ですね」

彼の言葉を遮って、私は彼の本来の言葉を代弁する。彼は一瞬驚いたような顔をした後、いつもと同じ困ったような苦笑いを浮かべた。

「私と会うのは、今日が三度目です」

「そうでしたか……」

彼はそれだけ言うと、黙ったまま夜空に浮かぶ月を見上げた。私も黙ったまま、同じ様に月を見上げる。音も動きもない、まるで時間が止まったかのような世界が続いた。

「24時間です」

その世界を打ち破って、彼はぽつりと呟いた。

「24時間……？」

「僕が記憶を保持していられる時間です。今日のことは、明日になれば全て忘れていきます」

その言葉に、私は何も言い返す事が出来なかった。若年性痴呆症程度かと思っていたのだが、まさかそこまでひどいとは思っていなかったのだ。

「自分がどこで生まれたのか、何故ここへ来ることになったのか、自分の年、名前、何も覚えていません。ここで暮らしていくのに必要な最低限の事だけが書かれたノートと貯金通帳だけが家に残されていて、他には何もありませんでした」

それでも

「……………」
「でも、あなたと三度も会っていると驚きでした。僕は毎日このくらいの時間帯にここに来ているみたいですね。不思議なものです、記憶は残っていないのに……………」

「……………少し、質問していいですか？」

私は意を決して彼に言葉をかけた。

「僕に答えられることなら」

「そういう病気で、つらいとは思わないんですか？」

「もちろんつらいです。知り合いの一人も作れませんから」

「じゃあ……………」

私は彼に最も聞きたかった事を尋ねた。

「死のうと思つたことはありませんか？」

その質問に、彼は神妙な面持ちのまましばし考えこんでいたようだったが、やがて静かに答えた。

「昨日の事は覚えていませんが、今の気持ちで言えば答えはいいえ、ですね」

「どうして!?! 昨日の事は何も覚えてなくて、知り合いはおろか自分の事すらわからなくて、そんなに不幸なのにどうして!?!」

私は思わず声を荒げた。彼の答えは、私の予想と違っていたからだ。もしかしたら、この想いを共感できるかもしれない。そんな淡い期待が、私にはあつた。

「……………僕は、何一つ権利を持ってない人間です。何かを買って所有権を得たとしても、次の日には何故それを買つたのか忘れてしまう。何かに挑戦しようとしたのかすら覚えていない。全て記録すればいいのかもしれないけど、それでは毎日昨日の記録を読むだけで終わってしまう。人生とは積み重ねだという事を、つくづく思い知らされます。積み重ねのない僕の人生は、人生とすら呼べないかもしれませんね。でも、そんな僕にもたった一つだけ与えられた権利があります。それが「死」です」

それでも

そう言うと、彼は真正面から私の瞳を見据えた。

「生きている人は、全て平等に「死」を与えられます。それは人だけでなく、この世界に生きる全ての生物に平等に与えられた権利です。こんな僕にでも与えられた、たった一つの権利……」

そして、彼はいつもと同じ様に困ったような苦笑いを浮かべた。

「あっさり使っちゃったら、もつたいたいじゃないですか」

私はただ、彼の苦笑いを見つめるしかなかった。全ての生物にもたらされる「死」。その悲劇さえも、彼にとっては愛しむべき大切なものなのだ。

「……もう夜も遅い。帰った方がいいですよ」

「……はい」

私は半ば呆然としたまま、そう短く返事を返した。

「あ、そうだ」

すると、彼は上着のポケットから少し小さめの手帳を取り出した。

「これ、あげます」

「え？」

「僕が書いた詩集みたいなものです。どうやら毎日書いているみたいで……。でも、昨日でページが一杯になってしまったみたいなんですよ。だから、あなたにあげます」

「でも……大切なものなんじゃ……」

「いいんです。どうせ見せる人なんていないんですから。あなたに見て貰った方が僕としても嬉しい」

そう言つて、彼は私の手にその手帳を乗せた。

「帰ります。お元気で」

別れの挨拶をして、彼が私に背を向ける。私は慌てて彼を呼び止めた。

「あの、私の名前は……」

「いいです。どうせ、明日には忘れますから」

彼は私に背を向けたままそう答えると、暗闇の中に消えていく。

私は別れの挨拶を交わすことなく、黙つたまましばらく彼の背中が

消えた闇をじっと見つめていた。

翌日の夕方、私は都会へと、元の日常へと戻ってきた。

サークルの仲間と別れ、家に帰る途中の電車の中で、私は昨日彼にもらった手帳をそつと開いた。中には一ページごとに丁寧な字で短い詩が書き綴られていた。

時には朝の陽の光を、時には昼の木々の美しさを、時には夜の闇に生える月と星を。彼はその日に見て感じた情景を、一文字一文字丁寧に言葉に綴っていた。

最後のページを開く。そこには、たった三行でこう書いてあった。
『誰も見てくれない。』

誰も聞いてくれない。

誰も教えてくれない。』

その三行を見るのがつらくて、私は手帳を閉じた。

こんなにつらいのに、こんなに苦しいのに、どうして？

ため息をついて、手帳をカバンにしまおうとする。その時、私は手帳の背表紙に何かを書いてある事に気がついた。

『それでも、』

たった五文字。ただそれだけの言葉でも、私には十分だった。

彼はこの点の後に、何を続けようとしたんだろう？

電車の中という事も忘れて、私は嗚咽を漏らしながら涙を流した。

それでも

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するというのが目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連は横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0932c/>

それでも

2008年11月7日06時50分発行